

(2)安心は高くても買うもの

年始めの中国産ギョーザ中毒から最近の事故米転売事件に至るまで、食に関わる事件・事故・不祥事が一向に減らないまま、食の安全・安心をいかに求めたらいいのか戸惑いが続いています。メディアの各種調査からも中国産離れや国産回帰、原産地表示のチェック、地産地消など、末端消費者の自衛策は細部にわたって意識していることが窺えますが、果たして安全は買うことが出来るのでしょうか。

小売り企業やメーカーでは原材料の品質確認やトレーサビリティ対応など、不安感の払拭への努力に意を注いでいるようですが、想定するほどには進んでいないようにみえます。そして消費者は何ら試す術も無く、環境の変化に耐え忍んでいるに過ぎないまま据え置かれているのではないのでしょうか。食料消費の洋風化・多様化など食生活の変化にあって内食から中食・外食が進んでの外部化が激しい今日この頃ですが、それだけに食の安全を守るという点での末端消費者は全く無防備の状況にならざるを得ないこととなります。

今の世の中、全てを自給自足して生きることは不可能なことであり、世界中からの食料供給が無ければ立ち行かない状況下において、偽装表示や不正な流通がまかり通ることは許される訳がありません。業務用需要としての流れは汚染米の転用ルートを見るまでも無く極めて広範に影響を及ぼすこととなります。それだけにごく一部の身勝手さ・我欲を押し通すことの不条理さこそが指弾されるべきものではないのでしょうか。

メーカーから末端小売りに至るまで、各業種業態で、コストがかかってもやらざるを得ないことは、如何にして安全・安心を消費者に認知してもらうかだと思いますし、消費者も、安心は高価な買物となることも止むを得ないと承知しなければならぬと思います。

(鈴木重雄筆)